



# 貝細工で伝える 感謝の思い

濱口 初美

聞き手・粟木利咲 川端彩加（石川県立志賀高等学校2年）

作品に使われる桜貝

## 自己紹介

名前は濱口初美です。昭和25年4月11日生まれ、65歳です。出身は富来町の西海です。一人娘がいます。娘は結婚してまして孫が2人います。

私の父親は漁師で、絶対怒らない優しい人でした。母親は長女でおとなしくて病弱な人でした。

娘はレジンフラワー講師をしているんですよ。レジンフラワーっていうのはね、もう43年前なんですけど、お花を入れてその上から樹脂を流し込んで3回くらいに分けて固めて作るものなんですよ。そこに貝を入れてアクセサリーを作ろうと考えました。

## 桜貝で恩返し

中学3年の3学期頃に結核っていう病気になったんです

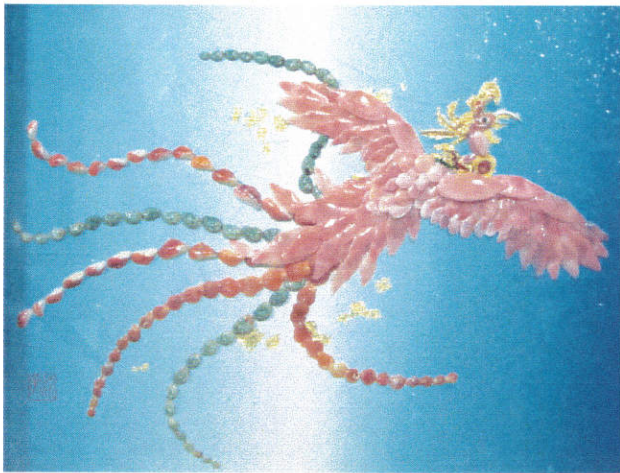
よ。進学も就職もできなくて、昔、富来病院が砂浜の近くにあったのでそこを散歩したら、何百種類もの貝がらがたくさんあるってことを知りまして。普通の貝はよく知ってたんですけど、5mmくらいの微小貝があるってことは知らなかったんです。それが増穂ヶ浦海岸との出会いです。

それからいろんな方達の作品を見てね。増田良仙さんっていつてね、鶏とか鶴とかクジャクとかお花とかを貝で作る人がいたんですよ。美大の先生に構図を習って、額に貝を置いた作品を、一番最初に作られた方で、繊細ですごくきれいです。富来の道の駅に増田良仙さんの作品が飾ってありますね。そんな方達の作品を見て、小物でなんかできないかなって考えて。

入院している5年間くらいの間に全国から千通のね、励ましの便りをいただいたんですよ。貝で元気もらったから、その人たちに元気になって頑張ってるよっていう恩返しのつもりで貝で何かできればなって。最初はただ貝を集めるだけだったんですけど、昭和41年頃に東京の病院に転院して



(左) 作業場  
(下左) 名人の渾身の作品「不死鳥」  
(下右) 六歌仙貝



いて、そのときに樹脂の使い方を習ったんですね。その時に、桜貝が合うなと思ってアクセサリーの作り方なんかも習ったんですよ。体が弱かったから物づくりに向いていたのかもしれないね。病弱な人とか今でもいるだろうし、そういう人たちに病に負けないで元気に頑張ってくれたらいいなって思って作っています。

## 初心

初めての貝細工は、ワラとか砂を樹脂の中に入れて、桜貝と組み合わせたりした作品を作りました。自然的というか、貝を壊さないでそのまま使いたかったからね。そのときは一生懸命だったからね。雨降ってても海に行きたし、いろんなものを見て歩いたしね。発想が浮かぶっていうか、夢にまで見たりしましたね。昔の作品は素朴な感じのものが多かったの、色もついてないし、砂とかワラとかくっつけたりしただけのね。最近のものはカラフルになってね、外国の人たちからの影響も受けて、色の付いたアクセサリーを作ったり、豪華さを出すために金箔を入れたりしてね。明るい作品になりました。

## 貝細工の流れ

貝細工に使う貝はね、昔から集めているものもあるし、足りなかったら拾っている人から分けてもらったりもしているね。能登ロイヤルホテルに勤めていた時にお客さんや旅行先に出会った人が、「こんなんあったよ」とか「頑張って作れよ」といって持ってきてくれてね。出会いがたくさんあったからね。お客さんがアドバイスしてくれたおかげでたくさんの種類も作れるようになったしね。教室で33年ほど教えてるけど、今でも子供たちが「こういう風に貝を組み合わせたらきれいになるよ」とか言ってくれて。子どもから教えてもらった部分もあるね。売店で置いてもらったりすると、どんなものが売れるかっていうのが分かったり。長い間勉強させて頂き、会社には感謝しています。

## 歌仙貝と花仙貝

増穂ヶ浦海岸っていうのは昔から短歌に使われていて、歌人たちが五・七・五で歌を詠ったんですね。それで昔は桐の

箱に綿を敷いてね、貝を並べて置いて集めるのが元禄以来、日本全国一種の流行で高貴な方たちの遊びだったみたいね。

富来には六歌仙貝、三十六歌仙貝、百歌仙貝とあります。間違いやすいのは花仙貝って言って同じ「かせん貝」っていう貝があるんですよ。この富来の人たちって全部の貝を歌仙貝っていう人が多いんですよ。花仙貝は白い巻貝の名前です。歌仙貝は歌われた貝のことをいいます。貝によって生息地とかも違いますしちょっと知ってもらいたいなと思って。

500種類から600種類もの貝がなぜ富来の増穂ヶ浦海岸に多いのかっていうと、やっぱり海がきれいなのが一番かな。それから、酒見と富来の両方に川があるんです。その川に生息してる貝もいるし、岩に住んでいたり、海藻にくっついていたり、砂の中や沖に生息してたり、そんなんで貝が多いんです。志賀町の、千鳥ヶ浜にもたくさん貝があがってますよね。波が打ち寄せると、真水とか川のそばのほうが結構あがってますね。

## 困難との闘い

自然が好きなお客さんとか女性が買って喜んでもらえるようにと思って作ってるけど、やっぱりデザインを考えるのが一番難しいですかね。貝を見たときから色合わせとか、どういう風で作ろうか考えたりしますけど、貝によって素材が違うからね。普通の絵を見とって、こんなふうには貝を置きたいと思ってもどの貝を使えばいいかわからなくて。決まってしまう貼り付けは早いんですけど、それまでがなかなか時間がかかるんですね。他にも、アクセサリとか帯留めとかも作ってるしね。

工程の中で一番難しいのはやっぱり樹脂を使う時かな。気泡がはいったりして思うようにできないところ。それはそれで、海を表現したものと言ってしまうといいんだけど。でも、一番気遣うね。桜貝はもろいからね、壊れたら壊れたでモザイクみたいな感じにしてもいいし、私自身はそのまま樹脂の中に入れて使ったり、樹脂を入れると壊れにくくなるんですよ。

## 多様な貝細工

この志賀町ならではのことで考えたのがあるんだけど、キリコのお祭りがあるでしょ。そのキリコに使われている木とか漆、和紙とかを貝にプラスしてっつね。和紙で行灯なんかも作ってるし、木に貝殻を貼ってペンダントにしたり、漆を塗った上に桜貝を貼ったりもできるしね。昔はい草とか使った作品も作ってたりしてたね。貝で感謝って字をかいったり、しおりをティッシュで作ったり。しおり作りは時間が短くてきれいにできるから。能登ロイヤルホテルで教室をさせ

てもらった時に考えたんですよ。

## 人とのつながり

もう33年前かな、能登ロイヤルホテルに勤めててそこで教室をひらいたんですよ。夏に旅行でくるお客さんのお供とか観光客に毎年教えてたんですよ。子供さんから教えてもらえることもけっこうあって、もう何十年もそこで旅行に来る人たち、京都とか愛知は貝がないのかね、桜貝が珍しいって言って何回も作りに来られる人もいるし、こういうところにも貝があるよって教えてくれたり、その土地によって貝の名前の呼び方も違うんですよ。地元のほうや金沢からも作りに来てくれますし。来てっつて言われると出張で行く時もあるんやね。たくさん貝が使えるっていうのがみんな嬉しいみたいで喜んで作ってます。

## 貝の歴史

鎌倉の由比ヶ浜、和歌の浦と共に、増穂ヶ浦海岸は日本三大美貝名所に数えられてきました。貝には2個名前があってね、「学名」と「地名」があります。お金のことを表す漢字って貝がつくことが多いじゃない。昔ね、タカラガイってゆう



(上) ティッシュで作られたしおり (下) 貝細工を体験してきた子供の様子



娘（智紀さん）の作品

のはお金に使われたりしてたんやね。他にも、タカラガイはコヤスガイともいって安産のお守りに使われたりとか、玉貝は開運のお守りとしてそれを持ってると幸せがくるよってことで、今でもお守りにして持ってる人もいるんやね。桜貝を持ってると幸せが来ると言いますが、30年前に能登ロイヤルホテルに勤めてた堀田光子さんという方が桜貝のピンク色は幸せが来ると考えてくださり、私が使っていたらいつのまにか富来の人たちも幸せが来る桜貝と呼ぶようになりました。

## 伝わる貝細工

後継者は娘の智紀です。娘は小さい時から私がつ作るところを見てるんでね。あの子は桜貝でお花を作るのが得意なんですよ。私に似て桜貝が好きなようです。梅や桜の花とかを桜貝で使ったり、松竹梅とかって題を決めて繊細な感じでタペストリーを作ったり、水引や行灯に使ったりね。注文を受けて作品を作っています。桜貝で作ったブローチが志賀町の推奨品や全国の優良お土産品に認定されています。

【取材日：2015年8月7日・10月3日】

## PROFILE

### 濱口 初美 はまぐち はつみ

昭和25年4月11日・65歳  
貝細工クラフト講師

中学3年時に病に倒れ、5年間の闘病生活を余儀なくされる。その際に増穂ヶ浦海岸に広がる小貝に出会い、素朴な美しさに慰められ、貝工芸に取り組み始める。好奇心と研究熱心さで貝細工の種類を増やし、キャリアは30年以上。地元の子どもや観光客に貝細工づくりを指導し、自然が生み出す魅力を長年にわたり伝え続けている。石川県観光連盟推奨品に指定され、石川県知事賞、石川県物産協会会長賞を受賞。平成16年石川県伝承の匠に認定。



## ● 取材を終えての感想 ●

取材や書き起こし、レポート作りなど全てが初めてで不安しかありませんでした。名人の方である濱口さんは私たちが何を質問すれば良いか分からず止まると、自分からいろんな話をしてくださり、そこから話が広げることができ本当に感謝しています。また、濱口さんの娘さんである智紀さんも明るく優しく接してくれ嬉しかったです。

桜貝はわたしも幼い頃から目にしていたのですが、この取材を通して桜貝での貝細工というものに触れることができました。様々な貝細工を見せてもらったり、実際に作ってみたりなど名人の方や役場の方たちが優しく教えてくれ楽しい時間を過ごすこともできました。年々貝が小さくなったり減り続けたりするなどの現状を聞き自分ではどうする事も出来ないと分かって寂しさを感じました。こうした中でも貝細工をし続ける濱口さんや智紀さんの作品をもっと多くの人々に知ってもらいたいと思いました。(川端彩加 写真：左)

今回初めて「聞き書き」に参加しました。インタビューや書き起こしなど、大変なこともありましたが、地域のことを知ることができたので参加してよかったと思っています。取材では緊張して言葉につまってしまうことがありましたが、濱口さんが自分から話をしてくださり、その後はスムーズに進めることができました。レポート作りの際も、分からないところがないか聞いてくださったり、丁寧に教えてくださり大変感謝しています。

「聞き書き」の体験を通してインタビューをしたり、文章をまとめる力がついたのではないかなと思うので、これから活かしていけたらいいなと思います。

普段何気なく目にする貝ですが、大きさも種類も様々であることや、古来から伝わる貝の歴史など、濱口さんのお話はどれも興味深かったです。また、珍しい貝があると全国から送ってきてくれる方がいるというお話を聞いて人と人のつながりの深さを感じました。濱口さんの思いが作品を通して、たくさんの人に伝わってほしいと思っています。(粟木利咲 写真：右)

